心斎橋平和の塔（『グラフ おおさか』21号 1974年3月より）

戦後すぐ、平和国家建設を願う市民の寄付金によってつくられた女神像。作者は彫刻家白石正義。はじめ心斎橋大丸の南東角に建っていたが、1974年初め道頓堀の戎橋北詰東に移動。今は失われている。

旧そごう大阪店壁面に飾られていた「飛躍」の像（中央区心斎橋筋）

ロダンの弟子兼助手を務めた藤川勇造の作品。かつてはそごうの御堂筋側の外壁に取り付けられていたが、今は心斎橋のそごう百貨店屋上で身近に見られるようになっている。

都市空間を彩るアートの系譜

菅谷富夫
大阪市立近代美術館（仮称）建設準備室・学芸員

都市には建物と人だけが集まるわけではない。道が造られ建物が建てられる時、大阪には多くの美術作品が設置されてきた。ビルの一部として、また道を通りゆく人を慰めるため、さらには平和国家建設の願いのしるしとして。市民の手によって設置された多くの美術作品は、大阪という都市の厚みであり、豊かさの象徴であった。

新ダイビルの羊の彫刻（北区堂島浜）

近代建築のお手本のような四角い形をしているビルの角に羊が一匹、二匹……。なぜ羊なの？ なぜあんなところに？ 何を見ているの？ 疑問がたくさん。建築家村野藤吾が仕掛けた街のユーモアか。

ダイビル玄関上の半円アーチと「鷺と少女の像」（北区中之島）

もうすぐ取り壊されるダイビル。正面入口付近のファサードには当時の官展系彫刻家・大国貞三の装飾レリーフが付けられている。鋳造家の家に生れ彫刻家として活躍した大国の作品も建物と一緒に失われることになる。

美術作品が美術館で展示されることを前提に制作されるようになった歴史はそう長いものではない。美術館という制度が確立して以降、すなわち概ね二〇世紀と考えてよいのではないだろうか。それではそれまで美術作品はどこにあったのか。王侯貴族の宮殿や寺院、商工業者である大資産家の邸宅をかざっていたのはいうまでもない。しかし普通の市民たちが目にする美術作品は街の中にあった。ヨーロッパなら広場や噴水を飾ったことは、ご存知のとおりである。日本の近代化の先陣をきった大阪も街の中に多くの芸術作品を持ってきた。

街の中の多くの美術作品は立体作品（古くは彫刻作品）である。それも四〇～五〇年前までのものは建築に付属するものが多い。そもそも彫刻の歴史が建築の装飾またはその一部として派生、発展してきたことを考えると、それも納得できることである。そこに建築家の好みが反映することはいうまでもない。

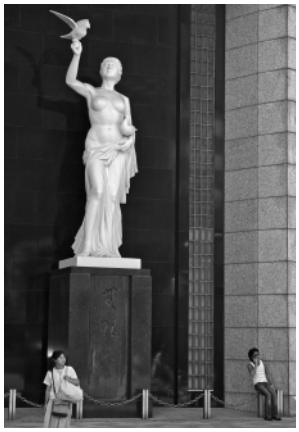
第二次大戦を挟んで大阪に多くの名建築を残し大阪の街並みをつくったとまでいわれる村野藤吾は建築にたくみに彫刻を取り込んでいる。心斎橋の今はなき旧そごう百貨店の外壁に付けられていた藤川勇造の「飛躍」や堂島の新ダイビルの羊の像などはその代表例であろう。そもそもが村野の建築の師匠である渡辺節が彫刻を生かした建築、ダイビルをつくっている。今でも中之島にかろうじて残っているこの建物の一階入口あたりには、当時の有名彫刻家・大国貞三の彫刻作品を見ることができる。

難波橋のライオン像（中央区北浜）

天岡均一の制作という。難波橋＝ライオン橋といわれるもとになった像である。神社の狛犬のように口を開けた阿行像と閉じた吽行像がある。象徴とか記念というより不可欠なものとなっている。

フェスティバルホール
南壁面レリーフ
[牧神、音楽を楽しむの図]
1958年（北区中之島）

土佐堀川を挟んで南側から見ると、フェスティバルホールの南壁に陶板によって描かれた不思議な生き物たち。ギリシャ神話に出てくる牧神が三人。それぞれパンパイプ、竪琴（神話上はいささか不自然？）、それと平和の象徴・ハトを持ち、まわりには月、太陽、星が配置されている。手前の錦橋とこのレリーフがつくり出す風景は、失いたくない大阪の景観のひとつである。制作は、当時関西でも独自の勢力を誇った全国的な美術団体・行動美術協会彫刻部の共同制作である。実際に陶板を製作したのは、建築タイル生産の草分けであり、この頃まだ建築陶板をつくりだしたばかりの近江化学陶器である。屋外の大きな作品は作家だけではなく、多くの周辺技術の集積によってつくられているのである。



長堀通・三休橋筋角の女神像（中央区南船場）

40年以上立ち続け、心斎橋界隈を見守ってきた女神像。映画などにもしばしば登場した名物像である。手にとまるのは平和の象徴・ハト。まだ戦争の記憶が鮮明に残っていた昭和30年代の作品ならではであろう。

植木茂
本町ビルディング
外壁レリーフ
1961年
（中央区堺筋本町）

船場。かつての大阪を、いや日本を代表するビジネス街。そのど真ん中である堺筋本町の南西角のビルに付けられた帯状のレリーフ。大阪の木彫作家として活躍していた植木茂の作品である。60年代のしっかりした建築がつくり出す街の雰囲気によく合っている。ここでは石が使われているが、その形態にはどこか木のような温もりが感じられる。知らず知らずのうちに目にしているものであるが、無かったらさぞや味気ない街になっていたのではないだろうか

近年の街の美術作品の中には壁から開放され、三次元的独立性を獲得したものも出てきている。赤や黄色のペンキを塗られ屹立する姿は、現代の都市という、刺激に満ちた情報が一瞬にして行き交う状況を視覚化したものともいえよう。さらには街の通りや街区というものを作品自体に取り込んだ生形貴春らの「弦の仕掛」のような大掛かりな、文字通り都市の芸術と呼べるような作品も登場している。

ここで取り上げたのはほんの一例であり、現在大阪に見られる都市の美術作品のバラエティには驚かされる。大阪は行政が音頭を取らずとも自らが欲するものとして美術を街につくり取り込んできたのである。それは都市の豊かさのひとつといってよいであろう。

生形貴春
［弧の仕掛／西風橋］［弧の仕掛／東風橋］
1994年（西区西本町）

なにわ筋にこの作品が出来た時、気付かずにタクシーで前を何回か行き来するうち、よもやと思い振り返ったことがある。真赤な鉄板でつくられたこの作品に気付かないはずはない。しかし、北に向かう時も南に向かう時も歩道側に見える。広いなにわ筋、左右にひとつずつ一対の作品だとやっと気付いた。歩いて横断歩道を渡る人には一目瞭然だろうが。中央大通りとなにわ筋の交差点近く、なにわ筋の門のような存在である。まさに都市そのものを取り込んだ作品。実現までの関係者の苦難には想像にあまるものがあっただろう。その情熱に敬意を払いたい。付け加えれば、この作品の左右のビルも合わせて対のように建てられている。

川島慶樹
［Birdy Twins］
1993年（中央区西心斎橋）

若者の街・アメ村のランドマークでもあるビッグステップ。その北側入口の前に置かれた作品。今では大阪を代表する彫刻家となった川島慶樹の作品である。金と銀の二つの対の作品。羽を広げて飛び立とうとする形にも見えるし、金と銀の大きなつぼみをもつ植物のようにも見える。アメ村に集まる若者たちの化身なのだろうか。周辺に今日もたむろする彼ら・彼女らはそんなことを気にかける風でもない。しかしいつかアメ村をこの作品とともに思い出すことだろう。街の美術作品にはそんな力も秘められている。

西村建三
［風の樹］　1997年（西区土佐堀）

サイズといい、色（まっ黄色）といい、通る人の目を引く作品である。それでいて嫌みのない軽やかさがある。鉄板を使いながらも紙のような単純な形がそう感じさせるのだろうか。ここ10年ほどの間に地下駐車場は出来、周辺のビルも建て替わってずいぶんとスマートなオフィス街（プラスマンション街）に変わりつつある土佐堀通り。その中で今では不可欠な存在となっている。ガラス面を強調した典型的な現代の建築物が並ぶこの街並みには、ブロンズの人体彫刻などよりこの作品がふさわしいのは衆目の一致するところだろう。

新宮晋
[波の記憶]
1994年（港区海岸通）

作者は、動く彫刻（キネティック・アート）の第一人者であった。電気やモーターを使わず、風や空気の動きに合わせて動く軽やかさが、彼の作品の特徴である。この作品では、白く塗られた金属の素材がその特徴を際立たせている。天保山という都市・大阪と海の境界に立つ風車のように、また灯台のようにきらめいている。

ダニ・カラヴァン
[高きへ]　1997年（東住吉区長居公園）

つい先日まで世界陸上が開催されていた長居陸上競技場。行ったことがある人ならほぼ全員が不思議に思う、入口のコンクリートの２枚の大きな壁と半分に割れた球体。イスラエル出身で国際的に活躍する彫刻家ダニ・カラヴァンの作品である。世界各地に作品を残すこの作家は、作品の立つ場所を地球的規模で考える。二枚の壁と球体の間を通る線は南北の軸でもある。そして壁に書かれた詩は日本の現代詩人のもの。右側には「こころよりからだへ　からだわがいとしきものよあひともにこのおもきつちけりてかなたへ」。左側には「からだよりこころへ　こころわがたのもしきものたづさへてはしりたたへむこのつちをこそ」。この作品を見上げながらこれを読むたび、スポーツと人間の崇高さに熱く胸を打たれる。長居競技場にこれ以上ふさわしいものはないであろう。